

第37回びわこ学園実践研究発表会報告

【平成29年12月2日（土）立命館大学びわこ・くさつキャンパス（滋賀県草津市）
法人事務局人財育成部

第37回びわこ学園実践研究発表会は、「いのちと暮らしに寄り添う支援～改めて日中活動支援を考える」をテーマに午前中はシンポジウムを行い、午後からは3つの分科会でテーマに沿った実践を発表し、参加者と討議しました。また、今年度は初代園長 岡崎英彦没後30年にあたり、その足跡を「岡崎英彦集」としてまとめましたので、研究会のはじめにその著書の紹介をびわこ学園障害者支援センターの初代所長の遠藤六朗氏にお話をいただきました。



初代園長の問いかけに応えるべく
今後も実践を深め拡げられるよう
取り組んでいきます。

初代園長没後30年にあたって

遠藤氏からのお話は、残された文書や録音テープなど膨大な関連資料を整理する中で、「初代園長が『本人さんはどう思てはるんやろ』と投げかけることで、糸賀先生の『この子らを世の光に』を『この子らと、ともに世の光に』、『ともに生きる』方へ導こうとしたのではないか」、「具体的には、重症心身障害のある方の人生を描くこと、施設も地域も手を繋いで『この子らを世の光に』を拡げて『ともに世の光に』とすること」、「その土台に『本人さんはどう思てはるんやろ』を据えることではないか」と、今回のテーマにも繋がる「支援者としての指針とすべきこと」が確認できたご講演でした。

シンポジウム「改めて日中活動支援を考える」

話題提供として、まず「超重症の利用者のプール活動の取り組み（センター草津）」で超重症の方でも多職種が協働し、安全・安心に支援することで、障害にともなう苦痛や不自由さから解放され、主体的に楽しめる活動が提供するという報告と、リハスタッフが中心に取り組んできた「グループホームへの移行を目標にした設定活動（センター野洲）」で入所施設でもサービス等利用計画の中に位置づけて日中活動を組み立てる必要があること、療養介護であっても施設外からサービスを入れるプランを立てることで本人のニーズに応えていく方策を求めていく必要があるという報告がありました。いずれも、実践と評価の過程で多職種が連携、協働し、10年を越える長期間に亘って取り組んで来たもので、活動の中で利用者本人の思いに寄り添い、職員間で共有するというコミュニケーション関係を築いてきたこと、日中活動支援は活動提供に留まるものではなく、本人の暮らしの支援として、利用者の生活さらには人生の過程の中に位置づけて検討し、提供されるべきものであることが確認できました。

第一分科会

「日中活動の組み立て～重度、重症化への対応」をテーマに、①センター野洲から「重度化がすすむ病棟での生活・活動の充実に向けた取り組み」、②知的障害児者地域生活支援センター・通所課から「利用者の重度化・多様化における日中活動の現状と課題から」の2題が報告されました。①では日課の見直しや業務、グループの再編成を行いながら散歩や離床への取り組みを通して、活動の進め方の工夫や連携が重要であること、②では職員配置や医療ケアなどをデータ分析し、看護師配置や空間の工夫から課題把握と理解、実践の共有が必要であるという内容でした。

助言者の西宮すなご医療福祉センター小谷地事務長からは、「日中活動をどうしていくのかを考える上で、利用者にとって活動の意味は何なのかを考え、利用者の人生の過程を意識し、職員として専門性を深め、創意工夫とチャレンジ精神を持って、社会に訴えていく役割を意識することが大切なのは」という熱いメッセージをいただきました。



各分科会の様子（左から第一分科会、第二分科会、第三分科会）

第二分科会

「日中活動の実践～多様な活動の展開」をテーマに、①びわこ学園障害者支援センター音楽療法士から「重症心身障害者と即興音楽」、②ピアーズから「運動活動でのAさんの意識の変化」、③センター野洲粘土室から「個々の感覚特性に配慮した取り組みの実践例」の3題を報告しました。即興音楽により音に対する関心や意欲が引き出され優しい歌声が聴かれたとき、家族やリハビリスタッフに支えられ通所支援員と一緒に取り組むことで苦手意識のあった運動活動が「うんどうはたのしい」という気持ちへ変化する姿を見たとき、素材や設定が工夫された感触遊びによりわずかな手指の動きや表情に変化がみられたとき等、いずれの実践もその繊細な表現を見逃さずにとらえながら返していくことで、本人自身もその表出に意味を見出していきます。

二年連続で分科会助言者を務めていただいた白石滋賀大学教育学部教授からは、「その人のもっているリズムに合わせる。間をもって気づきを大事にしていく。それは、ありのままを受け止めるということにつながる。」というお話をいただきました。

第三分科会

「医療ニーズに対する支援」をテーマに、①知的障害児者地域生活支援センターから「医療的ケアが必要な人の支援から見えてきた課題と今後はたすべき役割について考える～ヘルパー兼相談員の立場から」、②医療福祉センター草津から「呼吸器感染症対策における安全な腹臥位への取り組み」、③びわこ学園障害者支援センターから「二次障害のため新たな医療的ケアが必要となった利用者家族に寄り添う」の3題を報告しました。①では、在宅の医療的ケアが必要な人の利用できるサービスが限られている現状でのセンターでの取り組みの経過と課題および利用者のニーズと今後の方向性、②では、呼吸器感染症の予防に有効とされる腹臥位がリスクを考慮の上で安全に安楽に実施できるための病棟での対策と検討、③では、加齢や医療重度化により新たな医療的ケアの導入が必要になった本人および家族への支援の経過と日中通所施設の役割に関して参加者と討議しました。

第3分科会の報告者はいずれも看護師で、入所・在宅に関わらず、利用者個々の医療ニーズが高まる中で、ご本人と家族の生活を支えるために必要な医療や看護、ケア、サービスをどのように創っていくのかを改めて考える機会となりました。

今年は昨年度より多い230名を超える方々にご参加いただきました。午前・午後共に、出席いただいた皆様と日中活動から見た「いのちと暮らしに寄り添う支援」について今後の実践に繋がる意見交換をさせていただくことができた貴重な一日となりました。

